



酒林。その色の変化により酒蔵での新酒の完成を伝えるサインとなる。

タンクを空間化。一人一人入って過ごす小空間として適したスケールであることを生かしカプセル的な宿泊個室とする。

貯蔵空間をイメージ。暑い夏をも越えなければならず外気の影響を受けにくい工夫がされていた点を継承しシアターホールとした。

洗米工程をイメージ。寒い冬に冷たい水に触れながら作業していた蔵人の追体験となる。

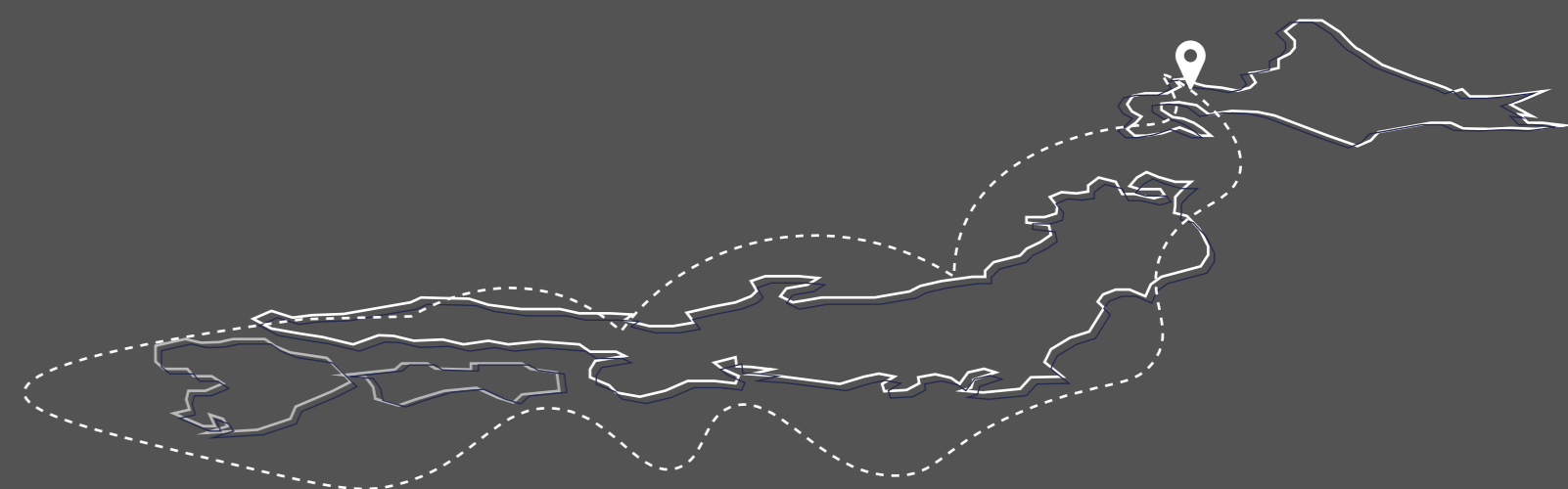
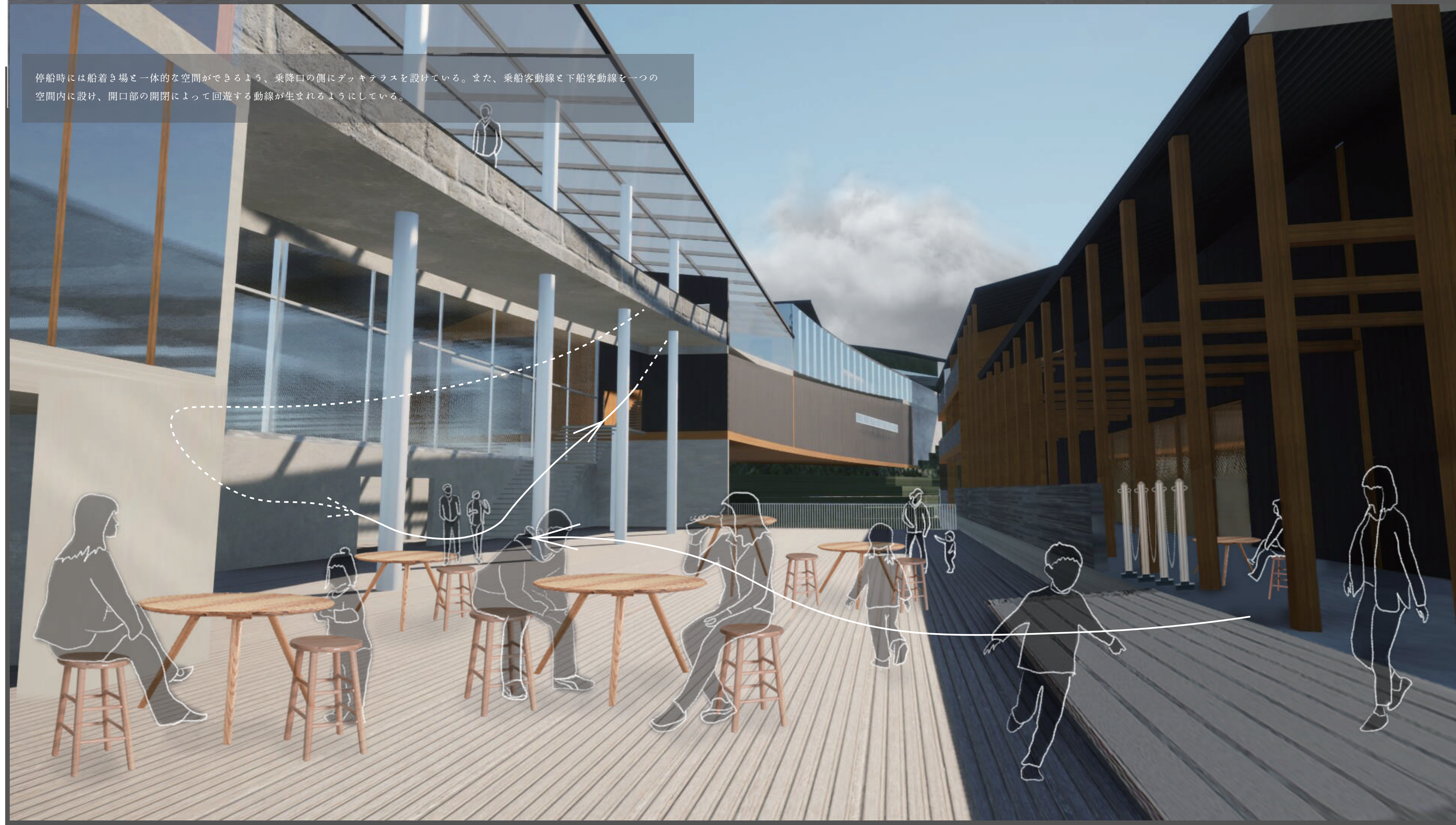
天井高が低く、高温になる麹室をイメージ。

醸仕込みの空間をイメージ。固まった空間でゆったりとした時間を過ごすことができる。

昔ながらの瓶をイメージ。木のぬくもりを体感する。

D-D' 断面 S-1:200

停船時には船着き場と一体的な空間ができるよう、乗降口の側にデッキテラスを設けている。また、乗船客動線と下船客動線を一つの空間内に設け、開口部の開閉によって回遊する動線が生まれるようにしている。



船は全国各地を移動しながら寄港地の酒とともにも特産品を味わう空間となる。客は飲み比べを楽しみ、寄港地の酒蔵やその他産業の活性化へとつながっていく。需要がなくなったタンク等の道具がある場合は回収し、この船で新たな役割を与える。船の用途は温浴空間とし、かつての酒蔵が持っていた要素を取り込み、酒目線での空間体験や蔵人の追体験となるようにする。酒蔵の文化を伝える手段として資料館や伝承館があるが、一度行く満足してしまったり、酒が飲めない人にとっては訪れるきっかけがなかったりするが、こうした空間を体験しながら酒造りを感じることで、裾野を広げるとともに長い時間をかけて酒蔵という建築様式が持つ魅力を記憶に刻むこととなることでより鮮明に文化を伝えていくことができるのではないかと。その空間体験がより魅力的なものとなれば繰り返し訪れうる場にもなるかもしれない。